「北海道支部だより」100号記念特集

誌面から見る協会の歩み

「北海道支部だより」100号記念によせて

日本建設機械化協会北海道支部
広報部会長　**杉　岡　博　史**

「北海道支部だより」は昭和38年７月に創刊以来、ここに100号を迎えることとなりましたこと、心からお喜び申し上げます。また、会員各位の皆様のご発展とともに機械化協会北海道支部の活動が益々隆盛となりますことを心から祈念申し上げます。

一つの大きな節目である100号発行にあたって、広報部会では、支部に大切に保管してある過去の「北海道支部だより」の誌面から、北海道支部の活動の歴史を辿る特集を企画いたしました。

記念の特集としては、甚だ粗雑なものではありますが、支部だより創刊の物語、支部だよりを支えた連載記事、建設機械損料の北海道補正誕生秘話、各種技術講習会の歴史や楽しい親睦会など盛りだくさんの記事であふれておりますので、支部の発展にご尽力いただいた会員各位、諸先輩の活動やその思いに少しでも触れていただければ幸いであります。

この間、紙面の発行に携わられた諸先輩を含めた多くの方々と、ご愛読をいただいた会員各位に厚くお礼を申し上げますとともに、今後ともご指導、ご協力を頂きますようお願い申し上げまして、記念特集の発刊のご挨拶とさせていただきます。

目　次

① 創刊号の誌面----31
② 誌面構成の変遷----32
③ 支部だより創刊の物語----33
④ 支部だよりを支えた連載記事----34
⑤ 創刊当時の北海道支部が直面した課題----35
⑥ インタビュー記事にも挑戦----35
⑦「建設機械損料」適正化の取組－北海道補正の実現－----36
⑧「建設機械展示・実演会」の実施----37
⑨「除雪機械展示・実演会」の実施----38
⑩「優良運転員・整備員表彰」の実施----40
⑪「自動車登録番号標封印事業者申請」事務の実施----40
⑫「建設機械出張車検」の実施体制を実現----41
⑬ 建設機械による施工技術の向上を支えた各種技術講習会----42
⑭ 建設機械整備技術の向上を支えた各種技術講習----44
⑮ 会員企業の技術力向上のため現場見学会及び各種講演会・講習会の実施----45
⑯ 新機種・新工法の実演発表会を後援----46
⑰ 北海道支部ホームページ開設----46
⑱ 親睦野球大会－みんな若くて元気だったね！----46
⑲ 盛大だった各種親睦事業----47
⑳ 北海道開発局と防災協定締結----47
誌面からみた支部所在地の変遷----48
編集後記----48

1 創刊号の誌面

北海道支部だより

第１号

昭和三十八年七月一日発行
社団法人 日本建設機械化協会
北海道支部
札幌市北三条東五丁目(岩佐ビル)
電話③四四二八番

支部だより発行あいさつ

北海道支部長　横道英雄

こんど支部だよりを発行することに致しました。

この支部だよりは、会員各位に常に支部の動きを知っていただくとともに、支部と会員各位との連絡、会員相互の親睦をはかり、また延いては会員各社と支部の今後ますます発展することを希求して発行するものであります。

何とぞよろしくお願い致します。

支部だより第１号(昭和38年７月発行)誌面より

村田氏（大成建設）優勝
春季親睦ゴルフ大会

昭和三十八年度春季ゴルフ大会が十一日真駒内ゴルフ場で行なわれた。参加者は横道支部長、森田副支部長、保田運営幹事長はじめ総員二十四名。これを七組に分け、午後一時スタートで始まったが、初夏の快晴に恵まれて技を競い、熱戦の結果、大成建設の村田氏が優勝した。成績はつぎのとおり。

優勝村田和男（大成建設）G九七H二七N七〇①岡田正勝（地崎組）八八、一七、七一②徳田健吉（ヂーゼル機器）九二、二一、七一③住友孝栄（三井建設）九九、二八、七二④斉藤正一（地崎組）一〇〇、二九、七一⑤三丁目喜一郎（菱和自動車）九〇、一七、七三。ブービー賞曾谷総一（北海道デイゼル）一〇二、一四、八八。

第七回親睦[illegible]

六月

協会支部主催の才七回親睦野[illegible]市美香保球場A・Cで行なわれ[illegible]

試合方法はトーナメント七回戦優勝チームには優勝旗、優勝カップその他。このほか最優秀選手賞、[illegible]チームは二十二チーム。熱戦が期待

講演と映画

七月二日

協会支部主催の講演映画会を七月二日

五月三十日　海野常任理事は札幌国立病院に入院療養中の前事務局長中林克之氏を見舞い、退職金を贈った。

六月　四日　才三回常任理事会（改選後才一回）を開き、横道支部長より五月十一日運転員養成対策について上声、開発局長に陳情結果を、海野常任理事より東北支部十周年記念式参列結果を、保田運営幹事長より五月二日の運営幹事会結果をそれぞれ報告。

六月十一日　春季ゴルフ大会を真駒内ゴルフ場で催す。

六月十七日　才四回常任理事会を開催、国際水利学会に出席のため渡隊する森田副支部長に欧米各国の建設工事の機械化実情調査依頼と、岩見沢市より依頼の才一回全国産業機械実演展覧会を後援することを決めた。

後記

○…『北海道支部だより』の第一号をようやくお届けすることが出来ました。この『支部だより』発行の目的は、最初の横道支部長のあいさつに述べられてありますので省略します。

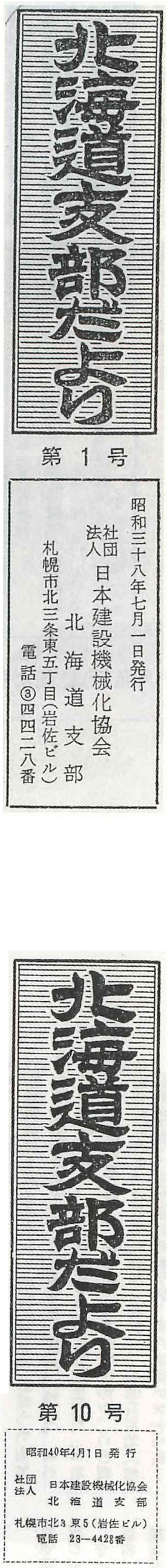
○…第一号でもあり、昭和三十八年度の新年度でもありましたので、古い支部だよりの感じが強いようになりました。

新年度（四月以降）からの行事を掲載したため、実際に編集してみたところ、技術的にいろいろな制約や、面倒な点がありましたので、ご覧のような形式をとりました。

○…次号からはもつといいものを作りたいと思つております。支部だよりに載せる原稿やネタを提供して下さいますようお願いします。（福）

支部だより第１号(昭和38年７月発行)誌面より

② 誌面構成の変遷 その１（タイトルデザイン）



第２８号
発行
昭和46年５月１日

社団法人 日本建設機械化協会
北海道支部だより

社団法人
日本建設機械化協会
北海道支部
札幌市北３条西２丁目
(富山会館)
電話 231-4428番

第３２号
発行
昭和47年８月１日

社団法人 日本建設機械化協会
北海道支部だより

社団法人
日本建設機械化協会
北海道支部
札幌市中央区北３条
西２丁目(富山会館)
電話 231-4428番

第 51 号
発行
昭和56年10月１日

社団法人 日本建設機械化協会
北海道支部だより

社団法人
日本建設機械化協会
北海道支部
札幌市中央区北３条
西２丁目(富山会館)
電話 231-4428番

第 68 号
発行
平成２年３月31日

社団法人 日本建設機械化協会
北海道支部だより

社団法人
日本建設機械化協会
北海道支部
札幌市中央区北３条
西2丁目(さつけんビル)
電話 231-4428番
FAX 231-6630番

第 84 号
発行
平成11年３月31日

社団法人日本建設機械化協会
北海道支部だより

社団法人
日本建設機械化協会
北海道支部
札幌市中央区北３条
西２丁目(さつけんビル)
電話 231-4428
FAX 231-6630

JCMA 2001.3.31 NO.86
社団法人 日本建設機械化協会 北海道支部 TEL 011-231-4428
〒 060-0003 札幌市中央区北３条西２丁目 さつけんビル
北海道支部だより

❷ 誌面構成の変遷 その２（書式・印刷）

第１号～第８号（S38.7.1～S39.12.1）

Ｂ５版　横長　縦書き　タイプ印刷

第９号～第27号（S40.4.1～S45.10.1）

Ｂ５版　縦長　縦書き　活版印刷

第28号～第70号（S46.5.1～H3.3.31）

Ｂ５版　縦長　横書き　活版印刷

第71号～第85号（H3.10.1～H12.3.31）

Ｂ５版　縦長　横書き　活版印刷（文字サイズ拡大）

第86号～現在　　（H13.3.31～）

Ａ４版　縦長　横書き　写植印刷（フルカラー）

❸ 支部だより創刊の物語

本誌の創刊は、今を遡ること47年、約半世紀前の昭和38年７月１日のことであります。

時あたかも、北海道支部創立10年を経て本格的な活動期へ歩を進めようとする時期であったものと思われ、広報誌もその重要な役割を担うこととなったのでありましょう。

しかしながら、諸先輩のお話を総合すると、それだけで順調なスタートを切れたものではなく、そこには「ある重要な人物の存在」があったようであります。

その重要な方こそ第３代事務局長福井政栄氏(在勤Ｓ38.1.21～Ｓ54.6.30、Ｓ57.5.11ご逝去)であったとお聞きしました。

福井さんは、当時の支部幹部役員であった方々とも親交があり、請われて事務局長就任となったようでありまして、前職が某道内新聞社の腕利きの記者であり、記事を書き紙面を作る言わばプロであった訳でありました。

勿論、報道や広報がもつ意味や重要性を最も知る方であり、また時代の潮流も業界並びに会員各社に大いなる飛躍を求めており、記者魂がペンを握らせたものと推察いたします。

今こうしてパソコンに向かう筆者も、多くの方々に読んでいただくモノを書くことの難しさと格闘中であり、発刊から17年余に亘り時々の話題と情報を提供していただいた先輩に深甚の敬意を表するとともに、心から感謝申し上げます。

福井さんは、当協会退職後僅か３年で病に仆れられましたが、我々後輩たちが曲がりなりにもその意志を繋ぎ続け、今日を迎えた姿を是非お見せしたかったと残念でなりません。

あらためて、心よりご冥福をお祈りいたします。

また、今日の100号まで発刊に携わりご協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

4 支部だよりを支えた連載記事

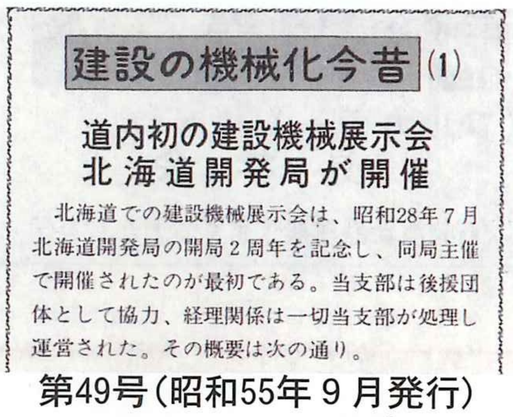
― その１「建設の機械化今昔」―

初の連載記事として登場したのが本稿で、同誌第49号（S55.9.30）を初稿に第74号（H5.3.31）まで、全26編の長編シリーズもので、今読み返してみても時々のニーズと建設機械の進化の歴史が、当時を知らない者でも手に取るように理解でき、物語としても実に面白いものであります。

この連載を手がけたのが筆者でもあり、戦中戦後から建設機械の進化の過程を見続けてきた、第４代事務局長和田清高氏であります。

同氏は、初稿から第14編まで自身で執筆し、以降は会員企業並びに関係団体などの専門家にもご協力頂き、通算26号、13年間にも及ぶものでありました。

連載の一段落と時を一に、同氏も事務局長の職を辞することとなり、完結となったようであります。

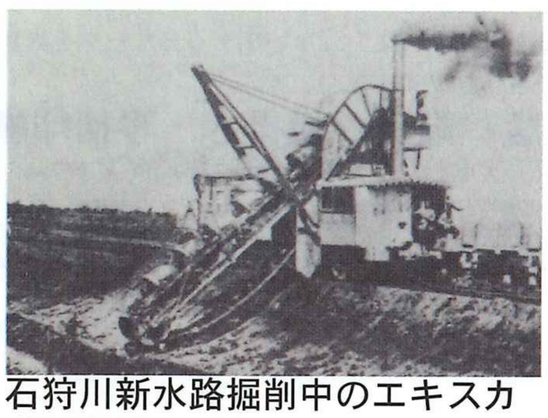


建設の機械化今昔 (1)

道内初の建設機械展示会
北海道開発局が開催

北海道での建設機械展示会は、昭和28年７月北海道開発局の開局２周年を記念し、同局主催で開催されたのが最初である。当支部は後援団体として協力、経理関係は一切当支部が処理し運営された。その概要は次の通り。

第49号（昭和55年９月発行）記事より



石狩川新水路掘削中のエキスカ
（第59号（昭和60年10月発行）記事より）

「建設の機械化今昔」タイトル

第49号	道内初の建設機械展示会　北海道開発局が開催
第50号	北海道支部発足　28年1月　会員48社・会費月1,600円
第51号	蒸気式建設機械
第52号	戦前戦後のブルドーザ　－昭和14年手稲鉱山㈱が導入－
第53号	建設機械化の書籍と型録　－戦後ブルの型録も「押均機」－
第54号	建設機械の運転技術者　－戦後は体験習得によるのみ－
第55号	ショベル系掘削機の推移　－戦後動かぬショベル大量導入－
第56号	道路維持用機械　長い道路清掃機械の試作期
第57号	基礎工事用機械　－構造物の大型化･公害対策とともに発展－
第58号	河川工事と浚渫船　－現在は民間保有の浚渫船が活躍－
第59号	河川工事と建設機械　工事用～維持用～災害対策用
第60号	建設機械の整備工場　－特定自主検査登録業者251社－
第61号	建設機械の整備　－動くなら止まるまで使う素人－
第62号	建設機械損料　－供用日当り損料15％割引－
第63号	アスファルト舗装機械　－フィニッシャ輸入車原型に翌年国産化－
第64号	農業用建設機械　－緊急開拓～索道客土－
第65号	湿地用ブルドーザの開発　－三角シューの発明－
第66号	篠津地域開発輸入機械　－世界銀行の借款－
第67号	除雪機械（その1除雪トラック）－昭和18年日本初試作第1号－
第68号	除雪機械（その２ロータリ除雪車）－2人がかりの操作～ロボット化－
第69号	作業船（その1）－戦中は軍港建設のも活躍－
第70号	作業船(その２)－戦後はカラフル化･溶接構造－
第71号	ダム施工設備機械（その１）－コンクリート打設設備－
第72号	ダム施工設備機械（その２）－コンクリート運搬・製造・セメント輸送設備－
第73号	ダム施工設備機械(その３)－骨材製造設備－
第74号	道土木部の建設機械　－30数台から始まる－

― その２「建設機械施工の安全管理」―

本題連載は第89号（H16.10.28）に始まり、第98号（H21.3.31）までの10回･５年に及ぶシリーズもの、時代は建設工事における労働災害が、企業・産業上げての取組強化により減少過程にありましたが、一方では熟練技能者の減少と相まって、機械の安全対策に頼り過ぎ、初歩的な人為ミスによる災害・事故が目立ち始めます。

本稿は、土工・基礎・荷役・舗装から除雪機械まで、安全対策を含め高度化される最新の機械を紹介しつつ、施工における安全管理の基本をコンパクトに解説したもので、現場での実作業や安全管理に大いに役立ちましたし、今もって教書としての色彩は失っておりません。

執筆をされたのは、当時、当支部広報部会広報委員長を務められていた林勝義氏であります。

建設機械に関わる行政の中にあって、建設機械の安全対策を主導された同氏の経験を遺憾なく発揮された連載記事でありました。

ウラ話

ご本人にお聞きしたところ、当時、支部業務の大半が事務局に集中し、事務局長をはじめ担当者が大変なご苦労をされていたようでありまして、この状況を少しでも改善しようと、各部会の活性化を推進しようとしたそうであります。

結果､「広報委員長として自らもペンを握るハメになった」と笑っておりました。

― その３「情報化施工の普及に向けて」―

直近の第99号からは、最新技術の「情報化施工」をテーマに、国土交通省総合政策局建設施工企画課で、本テーマの普及推進を担当された谷崎敏彦氏（現　北海道開発局　網走開発建設部　施設整備課長補佐）にご多忙の中をお願いし、ご紹介とご指導頂きます。

業界の未来を左右するであろう最新技術について、大いに期待いたしております。

❺ 創刊当時の北海道支部が直面した課題

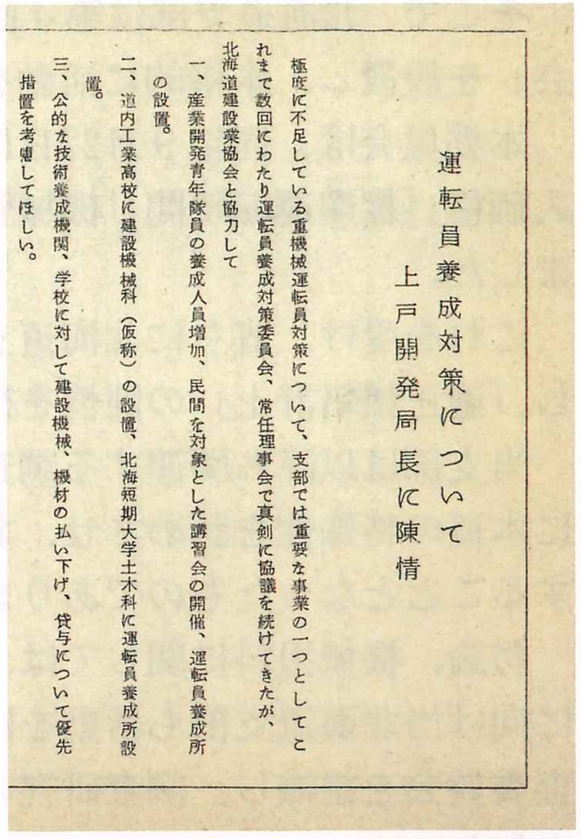
支部だより第１号（S38.7.1）に「運転員養成対策北海道開発局長に陳情」との見出しがありました。

時恰も、第二期北海道総合開発計画がスタート、事業の飛躍的増加にともない、建設工事の一層の効率化が求められ、建設の機械化が猛烈なスピードで進んでいたようであります。

その一方で、超大型機械や高性能機械など、当時としての最新鋭機械を使いこなすオペレーターが圧倒的に不足し、業界における深刻な問題となっていたようです。

そこで、北海道建設業協会とタイアップし、当時の上戸開発局長に「官民一体でのオペレーター養成の実施」を陳情したもので、当支部の中心的な事業としてのスタートとなったもので、以降「建設機械大型特殊免許取得講習会」へと、昭和53年頃まで取り組まれたようであります。

当時を知るある先輩の話 ―「腕の良いオペレーターは「引抜き」など奪い合いが横行して、公務員給与の数倍の高値で取引(？)された」そうです。



運転員養成対策について
上戸開発局長に陳情

極度に不足している重機械運転員対策について、支部では重要な事業の一つとしてこれまで数回にわたり運転員養成対策委員会、常任理事会で真剣に協議を続けてきたが、北海道建設業協会と協力して
一、産業開発青年隊員の養成人員増加、民間を対象とした講習会の開催、運転員養成所の設置。
二、道内工業高校に建設機械科（仮称）の設置、北海短期大学土木科に運転員養成所設置。
三、公的な技術養成機関、学校に対して建設機械、機材の払い下げ、貸与について優先措置を考慮してほしい。

支部だより第１号(昭和38年７月発行)誌面より

❻ インタビュー記事にも挑戦

どちらかと言えばハードな記事の中、異色の記事を見つけました。

第72号（H4.3.31）と第74号（H5.3.31）に、インタビュー記事が掲載されていました。

前者は「道内初の女性建設機械施工技士を訪ねて」と題して、平成３年度の同資格２級に合格された女性と、後者は「ママさん建設機械施工技士を訪ねて」と題して、平成４年度の同資格２級に合格された女性を取材したものでした。

支部だよりの記事としては、何かホットするものを感じます。 当時目にした方々も同様に思われたのではないでしょうか、同時に大型重機を操る女性の出現に、世も平成を迎え、時代の変化を感じとられたことと推測できます。

突撃隊の取材を快くご協力頂いた女性お二人、共に「１級を目指す」と力強くお応え頂きましたが、あれから約20年、今も頑張っているでしょうか…。

いや、頑張っていてほしいですね……。



ママさん建設機械施工技士を訪ねて

―八幡聖子さん除雪作業に活躍―

平成４年度建設機械施工技術検定に八幡聖子（ヤハタセイコ）さんが２級の第１種に合格、さる12月２日付け官報に建設大臣名で公告され、晴れてママさん２級建設機械施工技士が誕生、早速、八幡さんが勤務する㈲八幡重機さんを訪ねました。

会社は釧路市からマリモ国道を40粁ほど行った丹頂の里阿寒郡阿寒町にあり、八幡さんは社長婦人であり、三児の母であり、経理課長を務め、さらに除雪作業に挑んでおられるご多忙の身、事務所にお邪魔していろいろお話を伺いました。

橋　本　この度は建設機械施工技術検定合格おめでとうございます。

八　幡　ありがとうございます。

橋　本　合格通知を受けたときのご感想はいかがでしたか？

八　幡　新聞の合格発表を見ると欠番がかなりあり、経験豊富な男性の方が不合格になるのだから、私などは当然不合格になっているものと思い、受験番号を見つけたときは予想外の喜びで一杯でした。

橋　本　学科試験はいかがでしたか？

八　幡　専門用語の意味がわからず苦労しました。

橋　本　実地試験はいかがでしたか？

八　幡　最初に第２種を受験しましたが、普段運転している機械とレバーの操作が違い大変戸惑いました。その後遺症がその後に受験した第１種にも尾を引き不合格を覚悟して帰郷しました。

橋　本　受験勉強はどうなされましたか？

八　幡　学科は講習を受けましたが、試験の１週間前になりましたら主人と二人で猛勉強したのが思い出されます。また、実技は主人と会社の方々から指導を受け大変勉強になりました。

橋　本　この試験の受験について、ご家族とのエピソードがありましたら？

八　幡　主人、中３、小６、小３の５人家族ですが、学科試験当日が生憎小学校の運動会と重なり、受験の是非について思案していたら子供達に説得され、後髪の引かれる思いと子供達のためにも絶対に落ちられないという複雑な気持ちで受験しました。

橋　本　建設機械を運転されるようになられた動機は？

八　幡　女の私にでも現場のお手伝いが出来ることがあればと思って。

橋　本　貴方が現在主に運転しておられる建設機械は？

八　幡　残念ながら社長（ご主人）が私の腕前を信用しておりませんので、ブルドーザで会社の構内除雪が専門です。早く子供達が通学するスクールゾーンの除雪もしてあげたいですね！

橋　本　女性として建設機械に対するご意見

〈八幡聖子さん愛車と共に〉

支部だより第74号(平成５年３月発行)誌面より

7 「建設機械損料」適正化の取組 ―北海道補正の実現―

「建設機械損料」の文字が登場したのは、第12号（S40.10.1）がはじめてであります。

建設工事における機械の導入が進み、工事費に占める機械経費が増大の過程にあり、「機械損料」の考え方はすでに導入されていたものの、約半年に及ぶ積雪寒冷期を余儀なくされる北海道にとっては、本州基準の機械稼働率に避けがたい差違を生じていました。

そこで、北海道支部は第４回常任理事会（S40.8.10）において「建設機械損料調査特別委員会」を設置し、本格的に活動を開始したものであります。

本委員会は、同年９月22日には調査実施要領を制定、同年12月中旬には損料算定要素の「購入価格」「標準運転時間」「機械管理費」に明らかな差違があることを調査結果として取りまとめました。

これを受け、直ちに北海道支部は横道支部長を筆頭に、北海道開発局長及び北海道知事に対し、「適正損料計上」の陳情を行いました。

当支部は以降も関連する調査を継続しつつ、昭和43年度の損料改定において、当時の建設省に本道の特殊性を認めさせ、北海道開発局は15％加算の北海道補正を昭和44年度工事より適用することとなったものであります。

勿論、機械損料に関しては、本紙面上に登場する以前の昭和30年代初頭には、積算の基準化に向け当北海道支部も活動をはじめており、昭和35年には建設省の依頼により建設機械損料調査委員会を組織し、調査研究の結果を「建設工事における機械経費積算基準」にまとめ答申しました。

こうした地道な積み上げの結果、我が国でははじめて「機械損料の標準化」が実現したそうであります。

その背景には、戦後復興に伴う急激な社会資本整備の要請の中、公共建設工事も、それまでの「官の直営」から「請負」へと転換期にあり、必要に迫られたものと思われます。



改訂機械損料

算定表等北海道版の発行

研究会・説明会の開催

昭和四十三年度に建設機械損料が改訂されるに当たり、北海道支部では北海道が遠隔の地であること、積雪寒冷地であること等の特殊事情下にあるため、この特殊条件を機械損料の数値に認めて貰うべく実情を調査して建設省に対し陳情した結果、全面的に認められて改訂された損料算定表には、北海道地域にだけ適用される数値の補正及び加算が出来ることになつた。

すなわち機械の購入価格に対する運賃の加算、供用日数当たり損料に対する一五パーセントの補正がそれである。

これらはいずれも北海道においてのみ適用出来る数値であるので、北海道開発局では全国共通の改訂機械損料に加算運賃、供用日数当たり損料に対する一五パーセントの補正の北海道向き損料算定表を作成され、四十四年以降北海道において施工する公共工事に適用することになり、公表されたので、支部では『建設機械損料等算定表北海道版』としてB5版五百七十二ページの単行本を二月に五千部印刷発行し、団体会員に一冊ずつ贈呈し、会員以外は北海道開発協会をして配布させた。

またこれと同時に改訂　械損料の説明会を北海道機械開発㈱、札幌地区建設機械業協会、札幌建設業協会などと共催でそれぞれ開催し、改訂機械損料の普及に努力した。

なお、建設機械損料等算定表北海道版は、まだ残部があるので会員で余分に入用のものには実費で頒布するので支部へ申込むこと。

写真は改訂機械損料の説明会

支部だより第23号（昭和44年６月発行）誌面より

⑧「建設機械展示・実演会」の実施

本誌に「建設機械の展示会」が紹介されたのは、昭和39年３月１日発行の第４号誌面で、この時すでに第８回目を迎えており、北海道支部創設期からの事業（第１回は昭和28年、北海道開発局主催）であったと思われます。

当時は建設機械も一般市民には珍しく、興味津々の来場者で賑わい、建設機械の普及・広報に大いに役立ったことでしょう。

しかしながら、昭和58年度の実施を最後に誌面の掲載はなく、建設機械の普及と相まって、一定の役割を終えたものと推察できます。



北海道支部だより

大盛況で終始した
第10回建設機械展示会

北海道支部主催の第十回建設機械展示会は、四月十二日から十七日までの六日間、札幌市中島公園広場で華々しく開催した。

前回（四十一年）までは都心の大通公園七・八丁目で、五月上旬ないし中旬にかけて恵まれた条件のもとに開いてきたのが、今回は北海道百年記念で馴染深い大通公園も使われなくなつたので、都心からすこし離れた中島公園広場に会場を移し、開催期日も種々の事情でこれまでよりも約一ケ月早い四月中旬となつたもの。

北海道の四月はまだ街に残雪があり、気温も寒い。三月下旬からブルドーザで会場内の積つた残雪を砕き散らしたり、低地に溜つている雪どけ水を溝を切つて流して土の乾きを早めたり、水の流れが悪く水溜りになつている個所は砂利を入れるなど会場づくりにはなみなみならない苦心をした。またこの広場は扁平菱形をした六、五〇〇平方米で狭く。展示会実行委員会では予定以上の出品申込みにどう対処すべきかと、展示小間割りには深刻に悩み、二日がかりで展示小間割りを決めるなど、とにかく展示会場づくりには大きな苦心と努力が払われた。

このような経過をたどつていよいよ十

支部だより第20号（昭和43年７月発行）誌面より

誌面上での実施概要

実施回	実 施 日	実 施 場 所	出展数	来場者数
第８回	S39. 5．5 ～ 5．10	札幌市大通り西7･8丁目	出展社 52社 出展数400点	約50, 000人
第９回	S41. 5．5 ～ 5．10	札幌市大通り西7･8丁目	出展社 43社 出展数300点	約20, 000人
第10回	S43. 4．12～ 4．17	札幌市中島公園	出展社 48社 出展数700点	約25, 000人
第11回	S45. 4．22～ 4．27	札幌市川沿地先	出展社 59社 出展数700点	約36, 000人
第12回	S48. 4．20～ 4．25	札幌市川沿地先	出展社 61社 出展数800点	約13, 000人
第13回	S53. 4．20～ 4．24	札幌市川沿地先	出展社 47社 出展数500点	約13, 000人
昭和58年度	S58. 4．14～ 4．18	札幌市道立共進会場	出展社 46社 出展数600点 パネル展併設	約17, 800人

＊後援：北海道開発局、北海道、札幌市、日本国有鉄道北海道支社、
札幌通商産業局、陸上自衛隊北部方面総監部、北海道建設業協会、各報道機関など

⑨「除雪機械展示・実演会」の実施

除雪機械展示会は、道路除雪の本格化に平行し、高速・高精度除雪を可能とする除雪機械の技術開発が活発化する、昭和39年１月に第１回の産声を上げます。

以降、第９回までは毎年開催、第10・11回は隔年開催、その後２回は４年間隔、昭和62年からは、ふゆトピアフェアとして建設省と共催し今日に至るまで、21回に及びます。

除雪機械の最新技術を広報するとともに、冬期道路確保に関する啓発活動に大きく寄与してきました。

昨今は「ふゆトピアフェア」に象徴されるように、雪国の生活を楽しむため、「利雪」「克雪」を重要なテーマに東北・北陸と持ち廻りで継続実施されております。



北海道支部だより

年々盛んになる
第五回除雪機械展示実演会

北海道支部主催の第五回除雪機械展示実演会は、二月一日から四日までの三日間、札幌市中島公園スポーツセンター前広場で盛大に開催された。

冬季間の長い北海道では、冬期間の交通量の増大に伴って年々除雪区間の延長増加による除雪作業の機械化が強く要求され、また次の冬季オリンピック開催地である札幌市の市街地及びオリンピック各競技種目会場間の交通確保のため、北海道開発局、北海道、札幌市、学識経験者の協力を得て積極的に道路除雪の機械化対策を進めており、一方市民に対しては小型除雪機械購入者に補助金を交付する制度を新設するなど、北海道内においては〝冬の足〟確保は生活と直結した重要な問題だけに、国、道、市町村を問わず道民挙げて除雪対策〜除雪の機械化と真剣に取り組み、重要な課題となつている。

こうした事情を反映して会場には十八つがあり、正門に張られた紅白のテープにハサミを入れ、一同入場して開会式を終り第一回の実演を始めた。

実演は大型機のうちロータリー系は大型実演場内で、プラオ系は実演場の周囲を回る。小型機は小型機実演場、雪上車は小型機実演場隣接の広場で実演する方法をとり、実演のさいに出品会社名、機械名を放送して見学者にわかるようにつとめた。

今年の展示会には酒井重工の自走式スノーメルター、三井三池のスノーローダ、東洋運搬機のタイヤドーザなどの新機種が出品されて注目を集め、また北海道開発局建設機械工作所の試作機であるスノーブルーム、歩道除雪ロータリー装置、路面整正アングリングブラウは見学者の関心を深め熱心に説明を聞いていた。

北海道開発局による出品械械の性能試験は、二日目の三日午後から小型ロータリー機十台、三日目の四日午後から大型ロータリー機七台について行われたが、これは出品機種のうちから開発局が指定した機種について性能を試験するもので、試験を受ける機種の製造会社、販売会社の関係者はいずれも真剣であり、見学者も熱心に試験をみつめていた。

三日間の会期中、二日と四日はまずまずの天候に恵まれたが、中日の三日は朝からの猛吹雪にかゝわらず、熱心な見学者が会場を訪れて関係者を感激させていた。三日間を通じて見学者は全道各地からの団体、個人を合わせて約三、〇〇〇名を数え、多大の成果をおさめて終了した。

なお、日本機械学会と共催の『除雪・融雪機械に関する技術講演会』は、三日午前十時から札幌市の北海道自治会館第一会議室で開催。来聴者は全道各地から約二〇〇名、斉藤機械学会北海道支部長のあいさつの後、『道路除雪機械について』北海道開発局建設機械工作所建設監督官井田勝也氏。『市街地除雪計画』北海道建設業信用保証㈱社長、札幌市除雪対策専門委員会委員長高橋敏五郎氏。『大型ロータリー除雪車』㈱日本除雪機製作所社長田淵秀幸氏。『スノーメルター』酒井重工業㈱東京工場設計部次長小山富士雄氏。『中型ロータリー除雪車』㈱新潟鉄工所新潟車輌工場設計課長高柳次郎氏。『スノープラウ型除雪車』㈱金剛製作所設計課金子隆志氏等の講演並に北海道大学低温科学研究所提供の『雪の結晶』その他の映画を上映して盛況のうちに閉会した。

写真①は会場正門　②見学者で賑わう会場　③大型ロータリー車の実演　④性能試験　⑤除雪機械

支部だより第20号（昭和43年７月発行）誌面より

誌面上での実施概要

実施回	実 施 日	実 施 場 所	出展数	来場者数
第１回	S39. １. 31〜２. ２	札幌市 円山公園坂下グランド	出展社 13社 出展数 23点	約 4,000人
第２回	S40. ２. ５〜２. ７	札幌市 円山公園坂下グランド	出展社 15社 出展数 33点	約 3,000人
第３回	S41. ２. ４〜２. ６	札幌市中島公園	出展社 15社 出展数 32点	約 4,000人
第４回	S42. ２. ３〜２. ５	札幌市中島公園	出展社 17社 出展数 50点	約 5,000人
第５回	S43. ２. ２〜２. ４	札幌市中島公園	出展社 18社 出展数 60点	約 3,000人
第６回	S44. １. 31〜２. ２	札幌市中島公園	出展社 21社 出展数 60点	約 5,000人
第７回	S45. １. 29〜１. 31	札幌市北８東２広場	出展社 18社 出展数 65点	約 7,200人



’90ふゆトピアフェア（平２）



’93ふゆトピア（支部だより第74号(平成５年３月発行)誌面より）

実施回	実 施 日	実 施 場 所	出展数	来場者数
第８回	S46. 1．29～ 1．31	札幌市川沿地先	出展社 10社 出展数 37点	約 5, 000人
第９回	S47. 1．27～ 1．29	札幌市川沿地先	出展社 21社 出展数100点	約 5, 000人
第10回	S49. 1．31～ 2． 2	札幌市中島公園	出展社 15社 出展数 70点	約 4, 200人
第11回	S51. 1．31～ 2． 2	札幌市中島公園	出展社 20社 出展数 70点	約 3, 000人
第12回	S52. 2． 4 ～ 2． 6	記事掲載なし	記事掲載なし	記事掲載なし
昭和54年度	S55. 1．30～ 1．31	札幌市川沿地先	出展社 27社 出展数 90点	約 5, 100人
昭和58年度	S59. 1．30～ 1．31	札幌市道立共進会場	出展社 23社 出展数 62点	約 4, 900人
87ふゆトピア (建設省共催)	S62. 2． 2 ～ 2． 3	札幌市道立共進会場	出展社 28社 出展数118点	約15, 400人
90ふゆトピア (建設省共催)	H2． 2． 9 ～ 2．11	旭川市地場産振興センター	出展社 28社 出展数 88点	約12, 000人
93ふゆトピア (建設省共催)	H5． 1．30～ 1．31	札幌市月寒グリーンドーム	出展社 24社 出展数 75点	約12, 150人
96ふゆトピア (建設省共催)	H8． 2． 2 ～ 2． 3	小樽市	出展社 23社 出展数 75点	約 9, 000人
99ふゆトピア (建設省共催)	H11. 2． 4 ～ 2． 5	網走市多目的広場	出展社 20社 出展数 71点	約 2, 800人
02ふゆトピア (PIARC共催)	H14. 1．29～ 1．31	札幌市札幌ドーム	記事掲載なし	記事掲載なし
05ふゆトピア (国交省共催)	H17. 2． 3 ～ 2． 4	旭川市大雪クリスタルホール駐車場	出展社 17社 出展数 60点	約 4, 800人
08ふゆトピア (国交省共催)	H20. 1．31～ 2． 1	千歳市千歳中学校グランド	記事掲載なし	記事掲載なし

＊平成22年度は、北海道開催となり札幌市にて実施します。

10 「優良運転員・整備員表彰」の実施

昭和40年、第13回支部定時総会において、「優良運転員・整備員表彰」事業の新規採択がされ、同年８月31日「同表彰要綱」及び「同表彰選考内規」を制定、翌年第14回支部定時総会終了後、第１回目の表彰が行われ、会員企業の運転員６名と整備員８名が第１号の栄誉を受けられました。

本制度は、急速に進む建設施工の機械化と機械技術の高度化の中にあって、技術力を適切に評価し、向上心の高揚を図るとともに、施工の効率化と企業経営の効率化に資する目的でスタートしたもので、以降継続して実施されている事業であります。昭和41年度から平成22年度までの45年間で、**受賞者数は実に運転員631名、整備員487名の総数1,118名に達しました。**



支部だより第99号（平成９年10月発行）誌面より

北海道支部だより

初の表彰に輝く
運転員六名・整備員八名



<写真は表彰式>

建設機械運転員・整備員の素質向上をはかるため、支部では四十年度から新しい事業として優良運転員・整備員の表彰制度を制定した。

これは支部会員社に所属し、同一会社に満五年以上勤続して建設機械運転並に整備の実務に携わり、勤務成績優秀で他の模範とするに足るものを支部長が表彰するもので、支部では先に会員各社に対し該当者の推薦を依頼しておいたところ推薦締切り期日までに十七社から十七名の推薦があつたので、支部内の優良運転員・整備員表彰選考委員会（委員長新谷正男氏）で最終的に選考の結果十四名を被表彰者と決定、常任理事会で委員会の報告どおり決定し、四月十九日開かれた支部第十四回定時総会終了後表彰式を挙行した。

新谷選考委員会委員長から選考経過を報告したあと、横道支部長から表彰状に記念品を添えて一人一人表彰した。表彰された人々はつぎのとおりである。

◇運転員

小本秀雄（北海道機械開発株式会社札幌支店）斎藤直昭（岩倉組土建株式会社）鈴木広美（日本舗道株式会社札幌支店）津谷俊雄（橋本建設工業株式会社）及川勝見（大成建設株式会社札幌支店）

◇整備員

今田孝（金沢重機株式会社）小玉正治（北海道建設機械販売株式会社）中野清春（岩田建設株式会社）下向末五郎（小松サービス販売株式会社北海道支店）浜中保（日立建機株式会社札幌サービス工場）高橋高（北海道デイーゼル機械興業株式会社）鈴木一夫（北海道菱和自動車株式会社）梅沢良治（西松建設株式会社札幌支店）

支部だより第14号（昭和41年６月発行）誌面より

11 「自動車登録番号標封印事業者申請」事務の実施

この申請事業は、「０」「９」「８」の登録番号に該当する建設機械など、大型特殊機械の登録番号標（ナンバープレート）の「封印」に関する昭和54年の法律の改正にともない(社)日本建設機械化協会北海道支部と、(財)北海道陸運協会の協定により、昭和54年から「０」「９」、翌昭和55年からは「８」の登録番号の封印が申請事業者の責任において実施できることとなったものであります。

これらの登録番号に該当する車両の大半は、トレーラなどによる輸送を必要とするなど封印事務取扱所における混雑緩和と、行政サービスの向上の一環として、(社)日本建設機械化協会北海道支部とその会員企業（札幌陸運支局管内）にのみ実施されているもので、今日まで多数の会員企業が利用し、業務の簡素効率化に役立っているものであります。

12 「建設機械出張車検」の実施体制を実現

昭和39年当時、増大する建設工事に比例し、建設機械の増加と大型化が進み、札幌陸運事務所管内においても、車検場が大変混雑していたそうで、前日からの場所取りなども横行していたようであります。

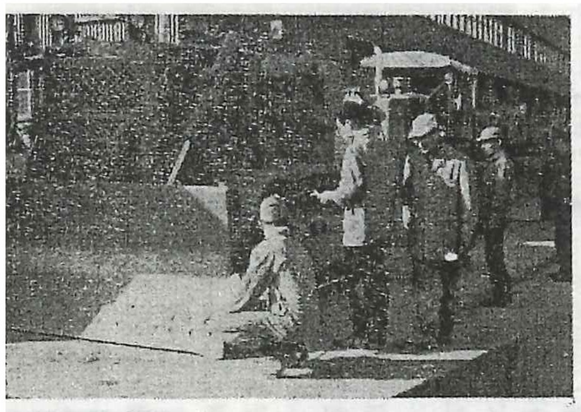
こうした現状の中、会員企業から「トレーラ輸送による経費の増大、事故の増加、車検場の混雑」などを解消すべく、**「検査官の出張車検」**の要望が強くなりました。

そこで当支部は、同年対策委員会を発足、実態報告書をとりまとめの上、昭和40年度の新規事業として、「建設機械出張車検」制度導入の働きかけを札幌陸運事務所に対して行ったものであります。

幸いにも札幌陸運事務所のご高配を頂き、当支部会員企業に限る一定のルールの下、４月１日以降毎週２回の**「出張車検」**が実現しました。

スタートは３ヵ月で98台に上り、大変好評だったようで以降約20年間継続的に実施されました。

第56号（S59.3.31）の記事よると、昭和59年度以降は札幌地方自動車整備振興会で引き続き実施することとなり、この時点で党支部の役割を終えたものと考えられます。



写真は出張車検風景（小松製作所倉庫で）

大好評の建設機械出張車検
六月までの受検台数は九八台

建設機械の出張車検については、この問題のため新しく設置した『建設機械出張車検対策委員会』（委員長石井正英氏、副委員長和田清高氏、松村忠氏）が札幌陸運事務所に実施方を陳情するなど努力が酬いられて昭和四十年度から実施を決定したので、委員会では別項のような『建設機械出張車検内規』を作成して北海道支部会員社に配布し、出張車検制度の活用を呼びかけ、四月から毎月二回ずつ出張車検を行なつている。

これまで車検を受けるのに、車検場までの往復に多額のトレーラ輸送費を支出したり、あるいは繁忙期に前夜から車検場へ機械を運び込み、泊りがけで順番を待つたり、またはトレーラ輸送途中市内での交通事故の心配なども、検査官が工場や倉庫まで出向いて検査を行なう『出張車検』制度の実施で、その必要もなくなり、いろいろな意味でこの『出張車検』は会員社から『大変たすかる』と歓迎され、喜ばれている。

なお、四月から始つたこの制度で六月までの出張車検台数は九十八台となつている。

支部だより第11号（昭和40年７月発行）誌面より



建設機械出張車検内規

一、出張車検日
原則として毎月第一、第三の水曜日とする。ただし陸運事務所の都合で変更する場合は事前に支部より連絡する。

一、出張車検区域並に場所
札幌市内を東部と西部に分け、原則として東部、西部とも各一個所に受検車輛を集中する。
車検場所、車検開始時間はその都度通知する。

一、出張車検台数
東部、西部ともブロックごとに十台以上まとまつた場合に実施する。

一、出張車検手続き
出張車検を受けんとする場合は申請書類を完備して車検二日前の月曜日午前中に支部事務局へ提出し、車検場所、時間を確認すること。

一、出張車検負担金
一台につき北海道支部会員社一、〇〇〇円、北海道支部以外の会員社一、五〇〇円、非会員社二、〇〇〇円とし、申請書類提出と同時に納入すること。ただし自動車整備振興会手数料一〇〇円と車検料四〇〇円は別に各自負担のこと。

一、出張車検機種
㈠装軌系の重土工機械、㈡ロードローラ、㈢タイヤローラ、㈣その他特に自走困難な車輛

一、出張車検方法
申請書を受理した事務局では自動車整備振興会、陸運事務所へ提出し、検査場所、時間などを打合わせて申請者に連絡し、検査当日は検査官の迎え、送り、その他については支部事務局職員が同行して行う。

一、その他
㈠出張車検日まで待たれず急を要する場合は従来どおり各自が手続きして車検場へ持込んで検査を受けること。
㈡再検の場合もまた各自が手続きして車検場へ持込んで検査を受けること。
㈢合格後の車検証は各自陸運事務所へ取りに行くこと。



13 建設機械による施工技術の向上を支えた各種技術講習会

—その１—　建設機械施工技士技術検定及び講習会（学科）

誌面上「建設機械施工技士技術検定」の活字を目にするのは、第14号（S41.6.1）で、「建設省が実施する二級建設機械施工技士技術検定に備え」講習会を実施との記事が、最初であります。

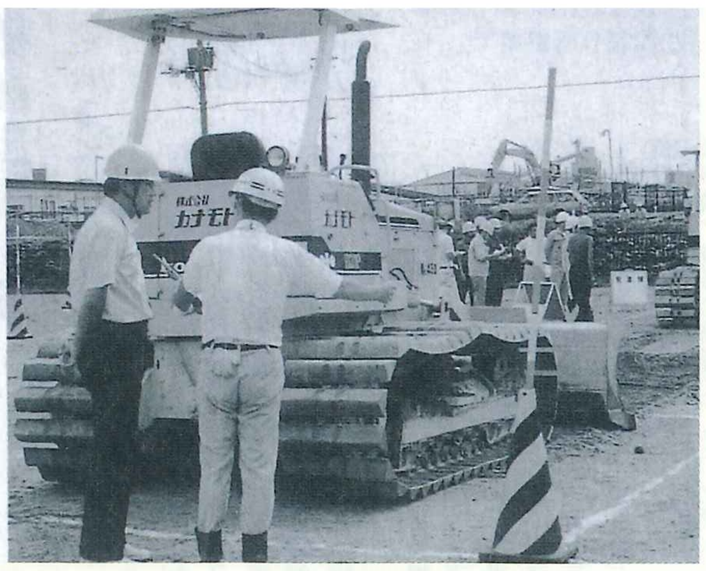
同検定制度は、昭和61年８月１日以降、実施主体を本省の直轄から（社）日本建設機械化協会へと代え、今日に引き継がれるとともに、建設業法の「主任技術者」「管理技術者」の資格要件や経営審査の加点要件ともなる、重要な制度となっております。

北海道支部は、協会本部の指揮の下、昭和62年度を初年度として学科及び実地の検定試験を継続的に実施しており、また、昭和41年度以降、資格取得を目指す希望者に対し、学科講習会は昭和63年度まで、操作実技講習会を昭和63年度から平成５年度まで実施し、有資格者の増加をサポートしてきましたが、検定の実施主体であることから、現在は学科講習会を（財）経済調査会へ、実地講習会を（社）日本機械土工協会へと継承し実施されております。

◆技術検定試験実施概要（昭和61年度～平成21年度までの24年間）

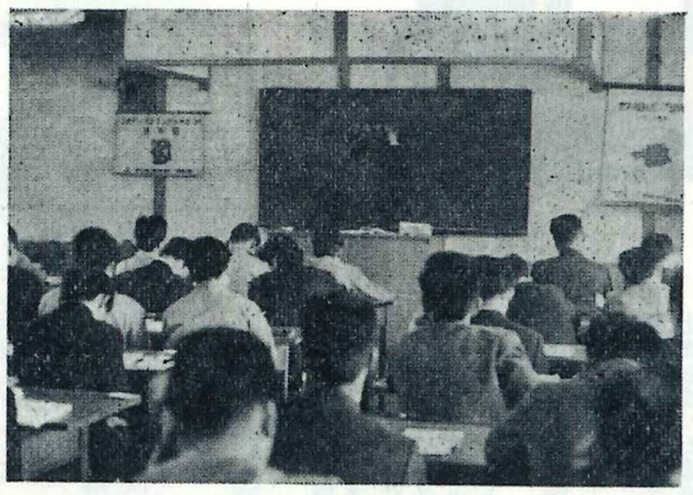
1　級				2　級			
学　科		実　地		学　科		実　地	
受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者
11, 269	3, 381	3, 198	2, 977	20, 827	14, 504	15, 816	14, 814

注）数値は期間中の延べ人数で、データ値の一部欠落部は推計値で集計した。



〈ブルドーザの操作方法は？　小松車両教習所〉

支部だより第69号（平成２年10月発行）誌面より



〈写真は講習会〉

二級建設機械施工技術検定　講習会を開催

昭和四十一年度に実施される建設省の二級建設機械施工技士技術検定に備え、支部では受検希望者のために講習会を四月四日から九日までの六日間、札幌市月寒の北海道開発局建設機械工作所で開催した。

会場の都合で定員五十名として受講者を募集したところ、締切前に早くも満員となり、三十余名を余儀なく断わるという状況であつた。

四日は午前九時から支部長代理の長尾常任理事があいさつを述べて直ちに講義に入つたが、受講者は全道各地から五十一名が参加し、北海道開発局係官はじめ会員社、その他関係会社に委嘱した講師が毎日午前九時から午後四時まで土木（気象を含む）、原動機エンジン、電気、運転取扱、ワイヤロープ、タイヤ、燃料油脂、グレーダー、ロードローラ、パワーショベルの取扱、同施工法、ブルドーザの各科目についてテキストにより講義したり、検定試験科目出題の傾向、受検参考について講義したが、受講者はいずれも熱心に受講していた。

支部だより第14号（昭和41年６月発行）誌面より



２級建設機械施工技術検定学科講習会

支部だより第44号（昭和52年６月発行）誌面より

—その２—　除雪機械技術講習会

除雪機械技術講習会が記事として登場するのは、第54号（Ｓ58.3.31）になります。

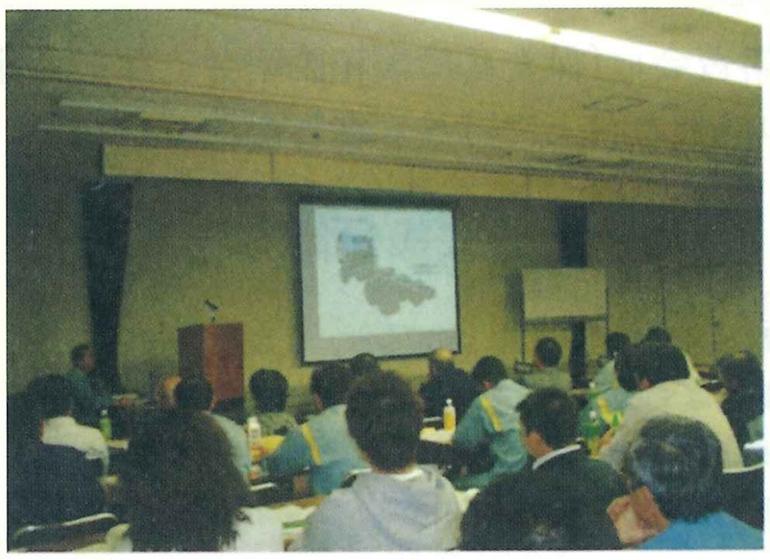
本格的な冬期道路管理体制の整備も進み、除雪機械も高速・高性能化の過程にありました。

こうした中、道路除雪精度の確保は、適正機械を適正に操り、機械の性能を100％発揮されることに掛かっており、また、高速化する性能と新機能の装備などによる、不慣れが要因の事故等の発生も懸念されたことから、会員企業の要望を受け、開発局・北海道・札幌市のご協力を得て、　昭和57年11月18日受講者202名をもって、北海道建設会館にて開催したのが始まりでした。

以降、平成21年度までの受講者は延べ12,096名を数えるに至っております。

最近の５ヵ年は、開発局の除雪工事受託者のオペレーター資格要件に同講習受講の義務づけがされたことと、熟練者の世代交代もあって、平均1,100名もの応募があり、平成17年度からは札幌市の他、旭川・函館釧路・帯広市などの地方会場も併設し実施しております。

雪国北海道の除雪システムを支えるこの事業は、北海道支部の重要な役割として、これからも継続されることと思われます。



除雪機械技術講習会
支部だより第90号（平成17年３月発行）誌面より



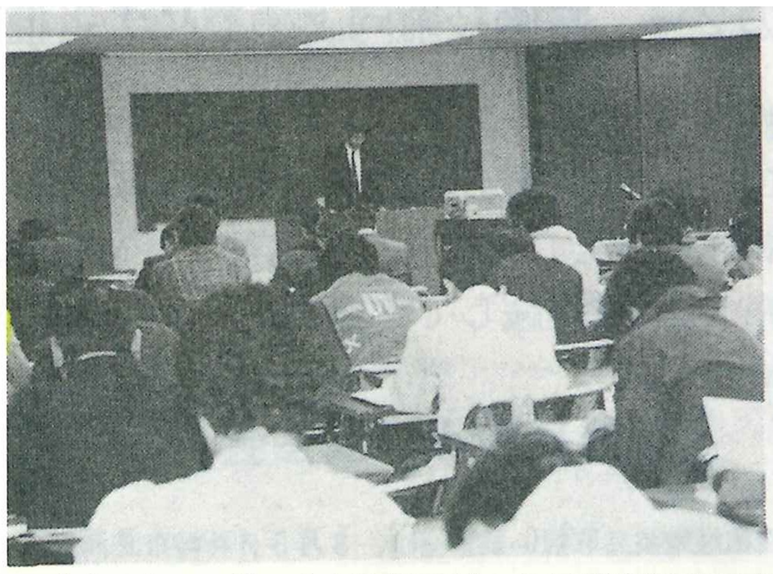
除雪機械技術講習会開催

道路除雪の請負化が進むなかで、業界の道路除雪技術向上のため北海道開発局、北海道土木部、札幌市建設局等のご協賛を頂き、11月10日北海道建設会館で除雪機械技術講習会を開催した。受講者151名。

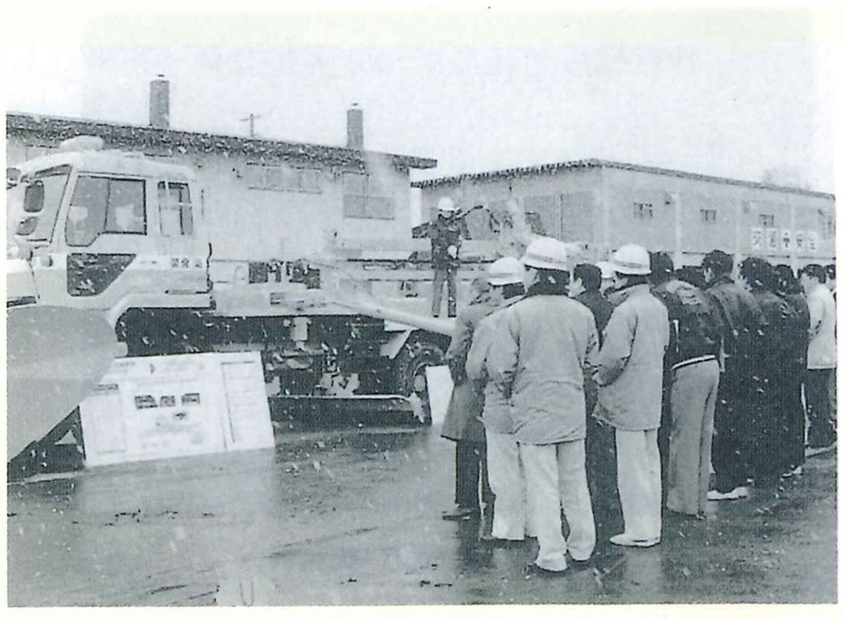
講習会は三本松幹事長（開発局機械課長）のあいさつにはじまり、各講師はテキスト、スライド等を使い詳しく解説、受講者は各講師の説明に熱心に耳を傾けながら要点をメモしていた。

なお、講習内容と講師は次のとおり。

雪と道路　……東　紀夫（開発局）
除雪の計画と工法　……村上昭治（開発局）
交通安全……酒井　宏（北海道警察本部）
トラック除雪とプラウ系除雪装置
……谷脇　博（協和機械）
ロータリ除雪車……綱島　寿（日本除雪機）
除雪ローダと除雪グレーダ
……金沢　勲（北海道小松販売）



〈除雪機械技術講習会　東講師（開発局）〉
支部だより第62号（昭和62年３月発行）誌面より



〈実車による点検要領の説明〉
支部だより第66号（平成元年３月発行）誌面より

14 建設機械整備技術の向上を支えた各種技術講習

—その１— 建設機械整備技能検定講習会

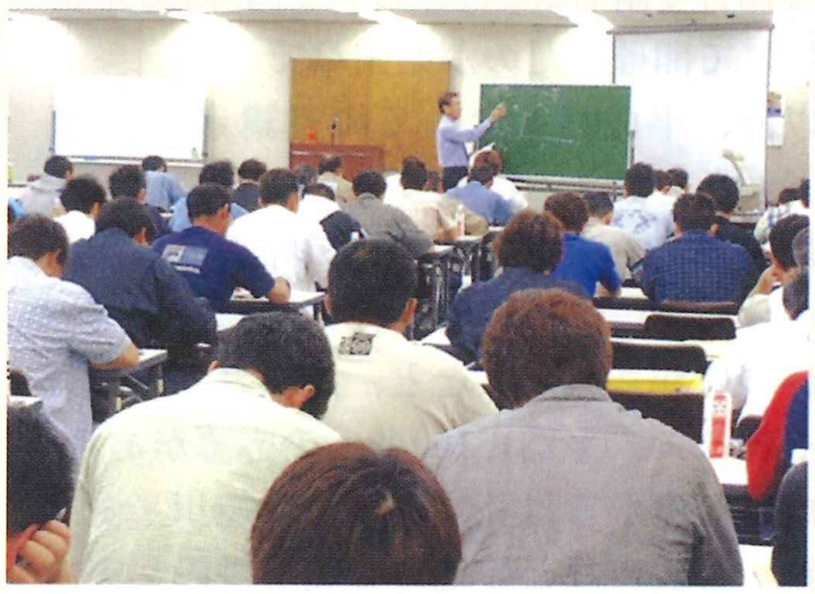
中央職業能力開発協会が所管する建設機械整備技能検定（実施機関 北海道職業能力開発協会）の、合格率向上を求める会員企業の要請を受け、昭和51年度から学科試験講習会を、昭和55年度からは実技試験講習会も加えて、今日も継続して実施しているものです。

受講者は、この35年間に於いて学科2,616名、実技１級694名、２級2,192名の多数に上り、検定試験の合格率向上をとおして、会員企業の技術力向上に寄与しているものであります。

また、当支部は実技検定試験の実施に際し、北海道建設機械リース業協会の協力を得つつ、昭和51年度から検定委員を派遣協力しております。



整備技能検定実技講習会



整備技能検定学科講習会

支部だより第89号（平成16年10月発行）誌面より

—その２— 整備技術向上のための各種講習会等

支部だよりを捲ってみると、日進月歩の建設機械技術に後れをとらぬよう、当支部が先導的にタイムリーな講習会を実施してきた姿が読み取れます。

「潤滑剤講習会」「電装品取扱講習会」「油圧機器取扱講習会」」「保安基準緩和説明会」など、適宜並びに複数年継続して実施され、各企業の技術者の技術力向上に寄与しました。

電装品取扱い講習会

建設機械電装品取扱い講習会は、３月３日札幌市北海道建設会館で開催、受講者は84名、北海道建設機械販売㈱松浦技術員を講師に建設機械の電装械器の構造、機能および保守管理について講習した。



＜写真は電装品取扱い講習会＞

油圧機器取扱い講習会

建設機械油圧機器取扱い講習会は、３月４日札幌市北海道建設会館で開催、受講者は111名、㈱不二越札幌営業所滝沢扱術員を講師に油圧の基礎知識、油圧機器、建設機械と油圧装置、油圧機器の保守管理、故障対策について講習した。



＜写真は油圧機器取扱い講習会＞

支部だより第40号（昭和50年４月発行）誌面より

15 会員企業の技術力向上のため現場見学会及び各種講演会・講習会の実施

—その１— 建設現場見学会

支部だより第１号（S38.7.1）には、「苫小牧港湾に石炭積込み汽船見学予定」とあり、翌第２号に「７月19日見学会実施」の事務局日誌が掲載されており、現在も実施されている現場見学会は、既にこの以前から行われていたことを伺わせます。

時には年複数回を実施したり、遠く東北地方まで足を伸ばすこともあったようであります。



青葉トンネル入坑前の説明
支部だより第88号(平成16年３月発行)誌面より

国土開発後発の北海道にあって、当時の会員企業にとっては大規模プロジェクト」「特殊工事」「新工法」「建設機械」など最新技術に実際に触れることができる絶好の機会でもあり、多くの参加者があった様子が掲載記事から伺えます。

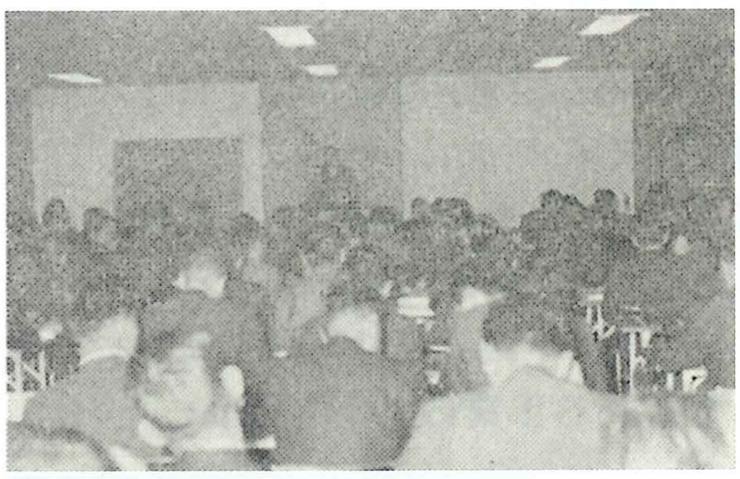
また、各地を訪れての日帰り見学会は、途中の昼食も地場産に恵まれることもあり、楽しみの一つであったようであります。

—その２— 各種講演会・報告会・映画会

現場見学会と同様に、建設技術の最新情報や最新技術を広く広報・普及するため、各種講演会・報告会・映画会が実施されました。

第２号（S38.9.1）による、海外視察団の「海外建設事情報告」や海外特派員の「海外裏ばなし」など、硬軟織り交ぜた講演と「建設工事や機械施工」の記録映画会を同時企画したのをはじめ、以降時々の話題を取り上げながら、多くの参加者を得つつ継続されております。

平成12年度からは、通常総会に併せて「支部講演会」として定例化され、業界・会員各企業に関心の高い話題を取り上げながら実施されております。



伊丹氏を迎えての建設の機械化講演会
支部だより第23号(昭和44年６月発行)誌面より

—その３— 各種講習会・説明会

会員各企業の実務担当者の知識や技術力の向上のための、この種取組が誌面に登場するのは、第20号（S43.7.1）が最初であります。

内容は、当時の建設省機械課長を迎えての、「改定機械損料説明会」でありました。

誌面の拾い読みだけでも、「歩掛・損料関係」12回、「建設機械の安全管理関係」７回、昭和55年頃からは揚排水ポンプやゲートの設計基準・要領などの「機械設備関係」６回、近年では「騒音・振動対策」「産業廃棄物処理」「新工法」などを「新技術セミナー」と称して実施され、何れも多くの聴講者があり、時には200名にも及ぶものもありました。

公共建設工事に携わる技術者にとって、必要不可欠な知識の提供をとおして、工事の品質管理の向上や各企業の事業活動のノウハウとして、寄与したものと思われます。



展示実演会場(支部だより第86号(平成13年３月発行)誌面より)

16 新機種・新工法の実演発表会を後援

会員企業及びその関連メーカーなどが企画する「新機種・新工法」の発表実演会について、建設業界の技術向上のため積極的に後援・広報をしてきました。

誌面の拾い読みでも20回程度実施しており、最近でこそ少なくなりましたが、記事として誌面から消えてしまう平成年代を含めると、かなりの回数を数えるのではないかと想像できます。

紙上の報告記事からは、参加者が100名から200名に及ぶものもあり、当時の関心の高さを伺わせます。

昨今では、各企業ともホームページを開設しおり、何時でも何処でも新しい情報に触れることが可能な時代になり、多少その役割は薄らいできたとは言え、やはり実物を間近にすることは価値のあるものでしょうね。

17 北海道支部ホームページ開設

第84号（H11. 3. 31）によると、支部のインターネットＨＰの開設は平成11年１月22日同時開設の記事が掲載されております。

その後、支部ＨＰは改修を行い、現在の姿で管理・運用されております。

18 親睦野球大会―みんな若くて元気だったね！

支部だより第１号（S38. 7. 1）に、第７回親睦野球大会の開催案内が掲載されており、記録に残るものはありませんが、昭和32年が始まりかと推測できます。

第７回大会は、会員企業並びに関係団体などから、何と22チームもの参加チームを数え、４日間で決着する大会運営は参加者共々大変なものであったろうと思われます。

以降、雨天で中止となった第25回大会（昭和56年度）を除き、平成元年の第33回大会まで続き、親睦事業とはいえ当協会の一大事業でありました。歴史ある事業に終止符をうったのは、「野球少年世代の高齢化」であったと思います。

参加数も24チームをピークに、昭和40年代半ばまでは20チーム以上ありましたが、徐々に減少し昭和50年代後半には遂に一桁となり、図らずも最終回となった第33回大会は８チームで戦われました。

筆者も野球少年の一人で、青空の下若者が汗まみれで大声を出し、熱風吹き荒れるグランドを駆け回る爽快さは、想像に難くありません。

エネルギッシュな若者が、大きく羽ばたいていた時代、懐かしく感じるのは小生だけだろうか ……。

第七回親睦野球大会
六月二十六日から四日間

協会支部主催の才七回親睦野球大会は六月二十六日から二十九日までの四日間、札幌市美香保球場Ａ・Ｃで行なわれる。

試合方法はトーナメント七回戦。ただし決勝戦は九回戦。使用球は長瀬健康ボール。

優勝チームには優勝旗、優勝カップ、優勝楯、その他。準優勝チームには準優勝カップ、その他。このほか最優秀選手賞、敢斗賞、打撃賞、ホームラン賞などが贈られる。参加チームは二十二チーム。熱戦が期待される。



〈優勝した協和機械製作所〉

支部だより第67号
（平成元年10月発行）
誌面より

19 盛大だった各種親睦事業

—その１— 春・秋期親睦ゴルフ大会

支部だより第１号には大会の結果報告があり、何時から始まったのか誌面からは読み取れませんが、昭和38年当時既に盛んになっていたことを思わせます。

この大会は、春と秋の年２回行われ、ピーク時には50人を上回る参加者があり、親睦・交流にその役割を果たしたものであります。

しかしながら、昨今では景気低迷の長期化や諸般の事情から参加者がめっきり減り、平成21年度からは年１回行事となりました。

また、誌面の記事としても第82号（H9.9.30）を最後に、姿を消してしまいました。(往年を知るものとして、寂しいかぎりです)

—その２— 親睦囲碁・麻雀大

支部だより第１号の事業計画に囲碁大会及び麻雀大会の実施が示され、麻雀大会は昭和56年度まで実施、ピーク時には50名以上の参加がありました。

囲碁大会は、平成７年度14名による実施報告を最後に、記事の掲載がありませんので、以降は中止されたものと思われます。

—その３— 親睦釣魚・ボーリング大会

釣魚大会は支部だより第８号（S39.12.1）に初見参、昭和39年度に荒天の中14名の参加をもって始まったようであります。

「釣キチさん」の要望で、年２回の開催をしたときもあり、ピーク時には60名を超える参加もありました。

しかし、釣魚大会は僅か10年余の事業で終了することとなり、換わってボーリング大会がはじまることとなります。

ボーリング大会は、昭和49年度をスタートし、誌上記事では第80号（H8.6.1）で平成７年度事業として掲載されたのが最後となりました。

20 北海道開発局と防災協定締結

「火山」「地震」「風水害」と災害列島とも言われる日本の現状に鑑み、日本建設機械化協会本部及び各地方支部が、国土交通省及び管轄地方整備局との間で「防災協定」の締結を致しました。

北海道においても、過去の大災害などの経緯を踏まえ、応急復旧や復興に建設機械施工の面から貢献すべく協定締結に向け作業を進め、平成21年３月17日「北海道開発局所管施設等の災害応急対策に関する協定」の締結に至ったものであります。

本件は、誌面の発行時期に間に合わず、記事として誌面を飾ることができませんでしたが、北海道支部の事業としての重要性を考え、編集委員の一存で支部だより番外編として取り上げさせて頂きました。



誌面から見た支部所在地の変遷

●支部創立時（S28．2．9）… 札幌市南２条西２丁目　山口ビル
㈱小松製作所北海道出張所内

（S33．5．3）… 札幌市北３条西１丁目　独立事務所へ移転

（S35．7月）　… 札幌市北３条東５丁目　岩佐ビルへ移転

以上、「北海道支部50年の歩み」より

●第１号　（S38.11.１）… 同上

●第15号　（S41.６.27）… 札幌市北３条西２丁目　富山会館へ移転

●第32号　（S47.８.１）… 札幌市中央区北３条西２丁目　富山会館

●第67号　（H１.６.17）… 札幌市中央区北３条西２丁目
さっけんビルへ移転　現在に至る

以上、記事「事務局日誌」より

編　集　後　記

「支部だより」100号は、特集記事との合併発行としましたので、４月の定期発行が大幅に遅れてしまいました。

定期の発行に記事をご提供頂きました皆様には、心よりお詫び申し上げます。

特集号の編集にあたっては、誌面の記事から当協会支部の果たしてきた役割と歩みを、できる限り忠実に掘り起こし、編集してみました。

限られた誌面にその全てを表現することはできませんでしたし、歴史を辿るに十分な内容となったのか甚だ疑問ではありますが、編集委員の流した汗に免じてご容赦頂きたいと思います。

最近数年間の「支部だより」を見ると、記事の内容も技術情報誌的な傾向となっており、過去の誌面と見比べると大きく変貌した感があります。

「どのような誌面が求められるのか」「どのような誌面作りを目指すべきか」これからも暗中模索が続きそうでありますが、編集委員としてはこれからも精一杯努力いたしますので、会員各位のこれまで以上のご協力をお願いいたします。

次回、第101号は平成23年４月１日の発行となります。

広報部会　広報委員会